

雪（≧）「ブンさんが死んだ」

○商店街

ガヤガヤと騒がしい人だかり。

ある箇所に野次馬たちが注目している。

男の声「救急車、救急車！」

男の声「今来ました！」

バタバタと慌ただしい人々。

八百屋から女、出てきて、

女「やだ、何？」

女「急に倒れたって」

男「ありやもう心臓止まってるだろ」

救急車のサイレンの音が近づいてくる。

雪（≧）「そして」

○アパート・雪の部屋（夕）

喪服の山本雪（≧）、入ってくる。

ドアをバタンと閉め、そのままたれかかる。

黒いハンドバックと紙袋、そして白い骨壺を抱えている。

遠くを見つめる雪。

雪（≧）「骨になった」

○タイトル

『ブンさんの骨』

○アパート・雪の部屋（夕）

雪、だるそうにパンプスを脱ぐ。

雪「痛……」
雪、ハンドバックと紙袋を床に放り投げる。

骨壺をテーブルの上に置く。

雪「あー、疲れた」

仰向けに寝転がる雪。

天井を見てため息をつく。

雪「（気づいて）あっ」

雪、ポケットを弄る。

雪「塩、塩」

雪、玄関に這って向かう。

雪「うぐぐ……」

雪、必死で前に進もうとするが上手く進めない。

雪「……ま、いつか。ブンさんだして、ふとテーブルの上の骨壺を見て、

雪、寝転がってテーブルに向かう。

雪「でもやっぱ……。ふんっ！」

雪、力を込めて立ち上がる。

慌てて玄関に向かう。

雪「他の人連れて来てたらやだし」

雪、パンプスを履きドアを開け外に出る。

○同・玄関前（夕）

雪、出てくる。

子供達の声が聞こえる。

雪、深呼吸をする。

ポケットから塩を取り出し、封を切る。

ふと横を見ると、松永富美子（72）が立っている。

雪「あ、富美子さん。こんにちは」

富美子、心配そうな顔で近寄ってくる。

富美子「……行って来たのね」

雪「はい」

富美子「ごめんなさいね。私も行けたら良かったんだけど、足がどうもね」

富美子、膝をさする。

雪「あー、いいですよ。なんか向こうの知り合いしかいなくてアウェイな雰囲気だったし。行かなくて正解です」

富美子、雪の手を取りさする。

不思議そうに富美子を見る雪。

富美子「雪ちゃん。この度は……」

富美子、涙がこみ上げてくる。

雪「富美子さん」

雪、慌ててポケットからティッシュを差し出す。

富美子「ごめんなさい、ごめんなさいね。私が泣いちゃうなんて……」

富美子、雪の手を強く握る。

富美子「雪ちゃん、気をしつかりね。今は辛
いと思うけど、時間が慰めてくれるから」

雪「（困惑して）は、はあ……」

富美子「一人で悩まず、何でも話すのよ？こ
ういう時は人を頼っていいんだから」

雪「あ、じゃあ……」

富美子「うん？」

雪「塩、かけてもらっていいですか？」

○同・雪の部屋（夕）

雪、入ってくる。

肩を手で払う。

パラパラと少量の塩が落ちる。

パンプスを脱ぎ、匂いを嗅ぐ。

うんうんと頷く。

靴箱から消臭スプレーを取り出し、パン
プスにかける。

骨壺の置いてあるテーブルの前に座る。

コンコンと骨壺を指で弾く。

蓋を開け中を覗く。

クンクンと匂いを嗅ぐ。

雪「ふうん」

蓋を閉じる。

雪「さて、と」

雪、台所に向かう。

冷蔵庫を開け中を覗く。

水や調味料しか入っていない。

雪、お腹をさする。

雪「ん……」

雪、冷蔵庫を乱暴に閉める。

骨壺のあるテーブルに戻ってくる。

じつと骨壺を見つめる。

蓋を開け中を覗く。

じつと中を見つめる。

雪「……食べようかな」

雪、骨壺の中に手を入れ弄る。

雪「んーと、これ！」

雪、骨壺から遺骨のかけらを取り出す。
まじまじと見つめる。

雪 「んー……」

雪 「遺骨を骨壺に戻す。

カバンを開け、スマホを取り出す。

雪 「こうゆうの食べても平気なのかな……」

雪 「スマホをいじる。

検索アプリの画面。

雪 「えーっと」

雪 「『骨』 『食べる』 と入力する。

『魚の骨は体にいい？ 食べても平気？』

『栄養たっぷり！ 魚の骨は食べるべき！』

『骨まで食べれる魚は？』 などの検索結果

が出てくる。

雪 「頭をかく。

雪 「そーじゃなくて……。えーっと」

雪 「骨壺を指を弾く。

ハツとして、『遺骨』 と入力する。

指が検索ボタンに触れる。

雪 「あっ、やば」

雪 「慌てて『遺骨』 の後に入力しようと

する。

画面には『遺骨』 の検索結果。

『遺骨とは？ 亡くなった人の骨のこ

と』 と検索トップに出ている。

それを見た雪、指が止まる。

骨壺に目を移す。

震えている雪の手。

目に涙を浮かべる雪。

雪 「う、うわああああ！」

堰を切ったように涙を流す雪。

雪 「あああああああ！」

雪 「自分の太もも殴る。

雪 「ブンさっ……。あああああ！」

雪 「テーブルの上にある骨壺。

雪 「あああああああああ！」

雪 「わんわん泣く雪。

○ 同・玄関前（夕）

雪 「雪の泣き声が漏れ聞こえる。

雪 （≧） 「結局、病気とか何とか書いてあつ

て怖かったので、骨を食べるのはやめた」

○同・雪の部屋（朝）

スマホのアラームが鳴る。
布団で寝ている雪。

雪「んー……」

寝たままの雪、スマホに手を伸ばしアラームを止める。
伸びをして起き上がる。

枕のそばを見て、

雪「おはよ、ブンさん」

枕元に置いてある骨壺。

× × ×

着替えた雪、パンを食べている。
テーブルの上に置かれた骨壺。

× × ×

歯磨きをしている雪。
そばに置かれている骨壺。
歯ブラシの水滴が骨壺に飛ぶ。
気づいた雪、袖で骨壺を拭く。

× × ×

雪、スニーカーを履く。

雪「行ってきまーす」

雪、出て行く。

鍵を閉める音。

テーブルの上の骨壺。

○出版社・社員食堂

昼時に混雑している食堂。
一人席でうどんをすすする雪。

神田の声「山本さん」

ビクツとする雪。

むせて慌てて胸を叩く。

振り返ると、神田章弘（た）立っている。

雪「（咳き込みながら）神田さん」
神田「あー、ごめんごめん」
神田、テーブルに置いてあった水を差し出す。
雪「すみません」
雪、水を流し込む。
雪「すみません、まだ打ち合わせに時間あったんで昼食べてたんですけど……。え、一時半ですよね？」
雪、慌てて周りをキョロキョロ見渡す。
壁時計は十二時四十分。
神田「そうだよ、一時半」
雪「びっくりした……。やらかしたのかと」
雪、うどんをすすす。
神田「昼ここかなーと思つて。やっぱ当たつてた」
神田、雪の隣の席に座る。
雪「下手にカフェ入るより安いんで」
神田「だね」
雪「神田さんは？ 今日社食なんですか？」
神田「あー」
雪「奥さん弁当作ってくれなかつたんだ」
神田「（氣まずそうに）あは。昼はもう食べたんだけど」
雪、うどんをすすす。
神田「……なんかデザートとか食べる？」
雪「えー、ヨーグルトですか？」
神田「なんか他のでもいいけど」
雪「え？」
神田「奢るよ」
雪「いいですか？」
神田「いいよ」
雪「やったー。じゃ、チヨコサンデー」
神田「了解。ちよっと待ってて」
雪「やったあ」
神田、立ち上がる。
雪「どういう風の吹き回しですか？ 奢ってくれるなんて」
神田「まあ、な。たまにはな」
雪「えー、なんかこわーい。打ち切り？ 打

ち切り？」
神田「（笑って）違うよ」
雪「紛らわしいことやめてくださいよー」
神田「……甘いもの食って欲しいから」
雪、神田の顔を見る。
神田、食券機に向かう。
雪「……」
雪、神田の背中を見たままうどんをすす
る。

○同・会議室

向かい合って座っている雪と神田。

葉山智希（㊟）、入ってくる。

葉山「失礼します」

雪「お疲れ様です」

神田、葉山を指して、

神田「話していた葉山」

葉山「葉山です！ よろしくお願いします！」

雪「よろしくお願いします。山本でー」

葉山「雪山先生のデビュー作、大好きなんで

すよ！」

雪「あ、ありがとうございます……」

葉山「いやあ、先生の担当になれて本当に嬉

しくて！」

雪「あの、先生なんてやめてください……。
小ちやい雑誌の月一連載しか持ってないん

ですから」

神田「小ちやい言うな」

雪「あ、すみません」

葉山「雪山先生はこれからもっと来ますよ！
僕と一緒に頑張りましょう！」

葉山、雪の手を強く握る。

雪「えっと、あ」

雪、神田をチラチラ見る。

雪「よろしくお願いします？」

神田「……まあ、葉山は移動してきたばかり

だけどほら、見ての通りやる気はすごいか

ら。ね」

葉山「はい！」

雪「あは、あはは……」

神田「最初のうちは慣れるまで俺も打ち合わせに参加するし」

雪「(ホツとして)はい」

神田「じゃあまず今やってる連載の今後の展開を……」

葉山「あの！雪山先生にご提案が」

雪「て、提案？」

雪、不安そうに神田の顔を見る。

葉山「エッセイとか書いてみませんか？」

雪「エッセイ？」

葉山「はい！最近売れてるんですよ。作者の非日常的な体験をありありと綴ったエッセイ漫画が！」

神田「漫画？」

雪「あ、えーっと、これでも小説家の端くれです……」

葉山「だから！この流れが文芸界にも来るんですよ！」

神田、目を瞑る。

雪、神田を見て、

雪「(ボソツと)あ、ダメだ」

葉山「雪山先生の新境地、開いてみませんか？」

雪「みませんでした……。いやあ、私は平凡な人間ですから、人様に面白がられるようなエッセイはとて……」

葉山「先生、最近恋人を亡くされたんだとか」

雪「は？」

神田「(慌てて)おいっ！」

葉山「お辛いでしよう……。その思いを！文字に吐き出してみませんか？」

葉山、身を乗り出す。

葉山「きつと天国の彼氏さんにも届くと思うんですよ！その純愛が！読者の心にも響いて」

神田、慌てて葉山を抑えつける。

神田「悪い、こいつ……」

雪「あー、せっかくだけどお断りします」

雪、顔をかく。

雪「自分、ファンタジーしか書けないので」

○アパート・雪の部屋（夕）

雪「入ってくる。」

雪「ただいまー」

雪「テーブルの上にある骨壺。」

雪「（微笑んで）ただいま」

雪「靴を脱ぎテーブルに向かう。」

雪「骨壺の前に座る。」

雪「くっそー、葉山の野郎」

雪「骨壺にもたれかかる。」

雪「いっちなばん苦手なタイプだわー。神田さん

も違う人後任にしろよなー」

雪「コツコツと骨壺を弾く雪。」

雪「私はファンタジー専門だっの。ファン

だって言うならちやんと読んどけ」

雪「骨壺を指で撫でる。」

雪「エッセイなあ……」

雪「頬杖をつく。」

雪「ファンタジーっぽいのなら書ける気がするけど……」

雪「骨壺をペタペタ触る。」

雪「んー、例えば……」

雪「骨壺を指で弾く。」

雪「ブンさんが幽霊になって現れるとか」

雪「骨壺の蓋を開け中を覗く。」

雪「ブンさん」

雪「しんと静まり返った部屋。」

雪「あはは……」

雪「蓋を閉め寝転がる。」

雪「そっと目を閉じる。」

× × ×

薄暗い部屋。

男の声「……雪……」

男「眠っている雪。」

雪「んー……」

雪「骨壺を弾く。骨壺の蓋を開け中を覗く。」

男の声「……雪……」

雪「うん？」

雪、目を覚ます。

天井をぼーっと見る。

男の声「雪……」

声を聞き目を丸くする雪。

ハッと飛び起きる。

玄関の方を見ると窓に人影。

雪「あ……」

雪、慌てて玄関に向かう。

裸足のまま勢いよくドアを開ける。

雪「ブンさー！」

ドアの前に立っていたのは松永英二

(二七)。

ぎよっとした顔で立っている。

雪「あ……」

野菜の入った段ボールを抱えている 英

二。

英二「こ、こんちはっす、雪さん」

富美子「あ、雪ちゃん」

雪「あ、英二と富美子の顔を交互に見る。

富美子「雪ちゃん……」

富美子「孫が野菜持って来てくれたからね、

雪ちゃんにもおすそ分けて思っ」

英二「ピンポン壊れてたみたいなんで外から

声掛けさせてもらいました」

雪「ごめんなさい、寝てて……」

雪、慌てて髪を手櫛で整える。

富美子「雪ちゃん……」

富美子「雪の手を取る。

富美子「辛いなら無理しないでいいのよ」

雪「え？ いや、私は何も……」

富美子「さつきも文一くんを呼んで……」

雪「あっ、いやあー、なんか夢を見てね？

それで、それでです！」

富美子「雪ちゃん」

富美子「雪を抱きしめる。

富美子「分かるわ。私もお父さんを亡くした

ときしばらくはね、信じられなかったの。

でもね、時間が解決してくれたわ」

富美子「ゆつくりでいいの。ゆつくりで」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

×

×

×

雪「あ、えっと……」

○家電量販店・店内

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

雪「あ、えっと……」

○アパート・雪の部屋
買った物袋をさげた雪、入ってくる。

雪「ただいまー」
テーブルの上に骨壺。

雪「修理二週間かかるってさー」

雪「冷蔵庫を開け買い物袋の中身を移す。
雪「うー、ネカフエ行くしかないのかあ」

雪「無くしそう……。ブンさんちよつと持っ
てー」
雪「お客様控えを骨壺の下に挟む。

雪「無くさないでね？」

雪「立ち上がり戸棚を見る。

雪「会員証どこやったかな」

雪「次々棚を開けて見る。

雪「無いな……」

雪「ウオークインクローゼットに手を伸
ばす。

雪「こっちだ」

雪「ウオークインクローゼットの中を見
渡す。

ノートパソコンがある。

雪「あ」

雪「ノートパソコンを取り出す。

ステッカーが貼られているパソコン。

雪「ブンさんのがあるじゃーん」

雪「ノートパソコンをテーブルの上に置
く。

雪「私天才」

雪「骨壺に手を当てる。

雪「ブンさんちよつと借りるね」

雪「ノートパソコンを開く。

電源ボタンを押す。

サインイン画面。

雪「パスワードを入力してください」と出
ている。

雪「あー、パスワードか……」

雪「しばらく画面とにらめっこする。

『password』と入力する。

『パスワードが違います』と出てくる。
『1234』と入力する。
『パスワードが違います』と出てくる。

雪「うーん……」
頭をボリボリかく雪。

○デパート・フロア

奇抜な洋服を着たマネキンが並べられている。
中央にランウェイ。
慌ただしく準備しているスタッフたち。
色とりどりの照明がいたり消えたりする。

スタッフと話している本田陽太(27)。

本田「あそこはもうちよつと照明落として」
バイブ音。

本田「ちよつとごめん。それよろしく」

スタッフ「はい」
スタッフ「はい」
本田「電話を取り、小走りで行く。」

本田「おい、雪！」

○アパート・雪の部屋

雪「思わず耳からスマホを離す。
本田の声「お前なあ、返信しろよ！」

雪「あー、ポンさん？　こんにちはー」

本田の声「ただ心配してると思ってたんだよ」

雪「ごめんなさい。でも既読はつけてるじゃないですか」

本田の声「文字打てよ」

雪「えー」
本田の声「何で返信しないんだよ」
雪「だってポンさんの使う絵文字なんかムカ

つくんですもん」
本田の声「ああ？」

雪「あはは」

○デパート・フロア
本田、ため息をつく。

本田「で、どうしながら会場を歩き回る。電話してきて」

本田「俺からのメールの服を整える。」

本田「俺からのメールは全然返信しないくせに」

雪の声「あー、今ブンさんのパソコン使おうと思っ」

本田「立ち止まる。」

本田「ブンの？」

○アパート・雪の部屋

雪「パソコン壊れたんですよ。今修理出して仕事できないから、ブンさんのでいいや」

雪「『〇』を連打する。」

雪「エンターキーを押すが『パスワードが違

います』と出てくる。」

雪「パスワードがね、分かんなくて」

雪「『パスワードが違います』と出てくる。」

雪「だから全然分かんなくて」

雪「人差し指でキーボードを打つ。」

本田「ポンスンならなんか知ってるかなーって」

雪「え？」

本田「ブンはパソコンにはロックかけてたんだろ？ だったらお前が開いていいものじゃない」

雪「（ムスツとして）……何ですか」

○デパート・フロア

本田「友達、いや男として全力で止める！」
真剣な表情の本田。

○アパート・雪の部屋

雪「……」

○デパート・フロアの声「……開けまーす」

本田「おい！」

雪の声「なんかパスワード思い出したら教えてください」

本田「おい、絶対止めるよ？　いいか？　絶対」

電話が切れる。

本田「雪？　雪？」

スタッツの声「本田さん」

本田「うん？」

スタッツの声「ちょっといいですかー？」

本田「あー」

本田「スマホとスタッツを交互に見る。」

スマホをポケットにしまい、

本田「どうした」

本田「駆けていく。」

○アパート・雪の部屋

雪「パスワードなあ……」

雪、パソコンの画面をじーっと見つめる。
『パスワードを忘れたら』をクリックする。

『ヒント :|over』と出てくる。

雪「……ろばー？」

雪、スマホを手に取りいじる。

雪「ラバー……。恋人……。ふーん」

ニヤつく雪。
骨壺を指で弾く。

雪「ふーん」

雪、『yuki』と入力しエンターキーを押す。

立ち上がり冷蔵庫に向かう。

ペットボトルを取り出す。

飲みながらテーブルに戻る。

パソコンの前に座る。

画面には『パスワードが違います』と出ている。

雪「え」

雪、『yuki』と入力しエンターキーを押

す。

『パスワードが違います』と出てくる。

雪「ええー……。あっ」

雪、『0812』と入力する。

『パスワードが違います』と出てくる。

雪「……はあ？」

雪、骨壺を覗む。

姿勢を正してキーボードを打つ。

『yamamotoyuki』と入力する。

『パスワードが違います』と出てくる。

『yuki yama』と入力する。

『パスワードが違います』と出てくる。

『yuki yamamoto』と入力する。

『パスワードが違います』と出てくる。

雪「えー……」

雪、骨壺を見つめる。

○同・玄関前（夜）

本田、ビニール袋をさげてチャイムを押す。

反応がない。

本田「雪ー？」

本田、ドアをノックする。

反応がない。

本田、ドアに耳を当てる。

ノックして、

本田「おーい、雪ー」

ドタドタと足音が聞こえる。

鍵が開く音。

ドアが開く。

本田、慌ててドアから離れる。

雪、ドアから顔を覗かせる。

本田「よっ」

雪、真顔になって、

雪「……名乗ってから呼んでくれませんか？」

本田「は？」

雪「いえ、別に」

本田「飯、食った？」

本田、ビニール袋を掲げる。

○同・雪の部屋（夜）

雪「コンロに向き合っている本田。」

雪「仕事だったんですか？」

雪「テーブルを拭いている。」

本田「そう。アパレルの展示会でな。演出担

当することになったから」

本田「コンロの火を止める。」

火にかけていた鍋を持ちテーブルに向かう。

本田「ほいほい」

雪「テーブルの上にタオルを置く。」

本田「鍋をテーブルの上に置く。」

雪「鍋」

本田「『ポン鍋』。うまいよー？」

雪「季節感ゼロですね」

本田「鍋はいいぞ、鍋は。いっぺんに栄養が
取れるからな」

本田「小皿に取り分ける。」

本田「ほらいっぱい食べ」

雪「はいはい」

雪「箸を持つ。」

本田「ちやんと食ってたか？」

雪「それなりには。いただきまーす」

本田「ならいいけど」

雪「食べ始める。」

雪「あー、うま」

本田「だろ」

本田「食べ始める。」

雪「久しぶりに食べました。『ポン鍋』」

本田「昔よく食わせたからな」

本田「チラツと壁際に目を移す。

ひっそりと置いてある骨壺。

見つめる本田。

雪「うまいな」

本田「骨壺から目をそらす。」

本田「で、パソコンは？」

雪「え？」

本田「パスワード、分かった？」

雪「あー……」

雪「箸を置く。」

本田「え？ 何」
雪「ぜんぜん分かりませんでした」
本田「まあ開くなつてことだろ。うちに使つてないやつあるから持つてこようか？」
雪「変なデータ抜きました？」
本田「抜いたよ！ てかともと入つてねえよ！」
雪「ブンさんのも入つてたんですかねえ」
雪、骨壺を見る。
本田「ま、まあ、ブンも男だし、いろいろあるだろ」
雪「ボンさんがいろいろあるのは分かるんですけど」
本田「おい」
雪「……パスワードのヒントがね」
本田「ヒント？」
雪「出てくるじゃないですか。パスワード忘れたらつて」
本田「あー、秘密の質問的な」
雪「『lover』つて出てきたんですよ」
本田「ラバー？ あ、恋人か。それなら」
雪「ハツとする本田。も、ダメでした」
雪「フルネームもペンネームも誕生日も身長も、ダメでした」
本田「黙々と食べる。」
雪「二人の記念日とかも、ダメでした」
雪「もぐもぐ食べる本田。」
雪「……昔の女のですかね」
本田「雪と目を合わせない。」
雪「ボンさん何か知りません」
雪「黙って食べ続ける本田。」
雪、本田の顔を覗き込む。
雪「目を合わせようとしないう本田。」
雪「友達だから、知つてますよね？ その辺」
本田「わ、分かんないな」
雪「ボンさん？」
本田「し、知らないよ」
雪「ブンさんつてモテてたらしいですね」
雪、本田に顔を近づける。
目が泳ぐ本田。

本田「——っそこらへんはもういいだろ！」

雪「えー」

本田「雪だつて聞きたくないだろ？」

雪「うーん」

本田「昔のことは昔のことです。それでいいだろ」

雪「生きてる人はそれでいいかもしれないですけど、もう聞けないじゃないですか」

雪、骨壺を見る。

雪「聞いたければよかったかな。ブンさんのこと、いろいろ」

本田「……ブンも自分のこと話すタイプじゃないからな」

雪「そうですけど」

雪、骨壺を見る。

雪「私、ブンさんのこと何も知らないんですよね」

本田「……」

雪「知らなかったんですよね」

○出版社・会議室

葉山「この間は本当に申し訳ありませんでした」

葉山、雪に頭を下げる。

雪、神田を見る。

神田「よく言つといたから」

雪「あ、はい」

葉山「神田さんにも言われた通り、本当に無神経でした」

雪「まあ、はい。もういいですよ。ね」

葉山「雪山先生にエッセイを勧めるなんて」

雪「は？」

神田「葉山？」

葉山「雪山先生のファンタジーは傑作なのに……。それを真逆のエッセイを勧めるなんて！

て！ 編集としてあるまじき行為でした」

雪「そっちか……」

雪、神田を見る。

神田「頭を抱える。」

葉山「二度と、このようなことがないように」

「します！」

葉山「雪の手を取る。」

葉山「これからもよろしくお願いします！」

雪「は、はあ……」
「ここにこしている葉山。」

× × ×

向かい合って座っている雪と神田・葉山。
葉山「パソコンを見ている。」

葉山「ん？ このデータは……？」

神田「こっちだよ」

葉山「あー、はい！」

雪「……葉山さんっていくつなんですか？」

葉山「僕ですか？ 今年二十七になります！
今二十六ですけど」

雪「へー。二十七……」

神田「どうした？」

雪「あー、葉山さんに一個聞いてもいいですか？」

葉山「はい？」

雪「葉山さんって今まで何人と付き合ったんですか？」

葉山「そういうプライベートな話、ズケズケ聞くのはどうなんでしょ」

葉山「首を傾げる。」

目を見開いて葉山を見る雪。

神田の方を見る。

頭を抱えている神田。

葉山「どうしたんですか、急にそんなこと聞いて」

雪「あー……。葉山さんくらいの年齢って普通どんくらいなのかなーって」

葉山「作品に何か関係あるんですか？」

雪「あー、はい」

葉山「五人です」

雪「五人……」

葉山「ちなみに今は半年付き合ってる彼女がいます」

雪「へえー。まあそれはどうでもいいんですけど」

雪「座り直す。」

雪「周りの人も大体五人とかですか？」

葉山「んー、そうですね。僕の友達とかも大

体それくらいでしたかね」

雪「へえー……。彼女に元カノの話とかしま

す？」

葉山「今の彼女に？」

雪「はい」

葉山「えー、しませんよ。そんな無神経なこ

と」

雪「無神経」

葉山「まあ聞かれたら話しますけどね」

雪「聞かれなきゃ話しませんか？」

葉山「はい、もちろん。自分から話すような

ことはしませんよ」

雪「ふーん……」

神田、不思議そうに雪を見る。

○アパート・雪の部屋（夜）

雪「入ってくる。」

雪「ただいまー」

雪「雪、テーブルの上の骨壺に駆け寄る。」

雪「ブンさーん」

雪「骨壺に頬をくつつける。」

雪「あー、冷たくて気持ちいいー」

雪「骨壺を撫でる。」

雪「ふと手が止まる。」

雪「……ブンさん。ブンさんって、あの……」

外から話し声が聞こえる。

雪「玄関の方を見る。」

本田の声「とりあえず急には無理だからさ

……」

雪「ポンさん？」

雪「立ち上がり玄関に向かう。」

本田の声「あとで俺が話しとくからー」

雪「ドアを開ける。」

と、立っている本田。

本田「（驚いて）ゆ、雪！」

雪「どうしたんですか？」
本田「あ、いや、ちよつと」

雪「何すか」
本田「慌ててドアを閉めようとする。」

ぐつと後ろから本田の前に立ちはだかる
ハル（27）。

金髪のロングで丈の短いワンピースを着
て、ピンヒールを履いている。

ぎよつとする雪。
雪を睨みつけるハル。

本田「ごめん、こいつブンの――」
ハツとしてハルを見る雪。

キツと雪を睨んでいるハル。
雪、ごくりと唾を飲み込む。

ハル「（野太い声で）あんたがブンちゃんの
彼女？」

雪「（拍子抜けして）へ？」
雪、本田を見る。

雪「お、男？」
ハル「だったら何よ」

ハル、雪を睨む。
雪「い、いえ……」

ハル「……ブンちゃんに会わせて」
雪「は、はあ……」

× × ×

テーブルの上に置かれた骨壺。
ハル、手を合わせている。

ハル「（泣き出して）ブンちゃん……」
雪「（こそつと）えつと、何者ですか？」

本田「ブンと俺の高校ん時からのダチ」
雪「女性ですか？ 男性ですか？」

本田「一応、男」
雪「あの格好は？」

本田「ゲイバーで働いててさ」
雪、ため息をつく。

雪「（ボソツと）昔の女かと……」
本田「え？」

雪「いえ何でも」

泣きじゃくっているハル。
本田「ほん、ハンカチをハルに差し出す。」
ハル「ハルよ！」
ハル「ハル、ハンカチを奪い取って勢いよく鼻をかむ。」
ハル「ブンちゃん死んじやうなんて……」
ハル「ポトルだつて残ってるのよ……」
本田「よくブンと春彦の店に飲みに行つたっけ」
雪「あ、ブンさん二丁目とか行くんですね」
本田「まあ春彦がいる時はね」
ハル「そうだつたわね」
雪「ハル、鼻をすする。」
雪「ブンさんと高校時代のお友達」
ハル「ええ」
ハル「ハル、目の下をハンカチで拭く。」
マスカラが落ちてパンダ目になっている。
ハル「ブンちゃん昔っからかつこよくてね。」
男子校だけどもテテ……」
本田「春彦みたいになつたわよ」
ハル「あ、あしが一番仲良かったですね」
雪「ブンさん男子校だったんですね」
本田「そ」
ハル「あんた何にも知らないのね」
むっとする雪。
本田「（ハルを指差して）こ、こいつ口悪くてさー！ ごめんな！」
雪「いえ別に」
ハル「ブンちゃんの彼女がどんなのか見に来れば……」
ハル「雪をじろつと見る。」
警戒する雪。
ハル「ハル、鼻で笑う。」
ハル「こんなのか」
雪「雪、眉をひそめる。」
本田「ご、ごめんなー、雪。こいつブンのこ
と好きだつたからさ」

ハル「あたしのがよっぽどブンちゃんにお似
合いだった」
本田「おいこらっ、バカ」
ハル「大体何であんたんとこにブンちゃんの
お骨あるのよ」
雪「はい？」
本田「そりゃあ彼女だから」
ハル「しかも何？ あんたこのまんま置いて
るわけ？」
雪「え、ダメなんですか？」
ハル「仏壇も置かないでお供え物もしないで
……。木彫りの熊とかじゃないんだから
ね！」
本田「おい春彦……」
ハル「ハルよ！」
ハル「ハル、雪を睨む。
ハル「雑に扱って……。こんなだったらお
墓に入れてあげなさいよ！」
本田「いやそれはさ。ほら、ブンのともい
ろいろあるから……」
ハル「でも！このままじゃブンちゃんがかわ
いそうよ！」
ハル「ハル、立ち上がる。
ハル「大体、何でブンちゃんが死ななきやい
けないのよ！」
ハル「涙が溢れてくるハル。
ハル「一緒に暮らしてるんだったら、あんな
がちゃんとして見てれば……。ブンちゃんは死
ななかつたんじゃないの？！」
本田「そんなわけねえだろ」
本田「チラッと雪を見る。
表情を変えない雪。
本田「雪の肩に手を置く。
本田「雪、なんか変なこと考えんのはやめろ
よ？」
ハル「だってそうでしょう？ ブンちゃんか
死ぬなんてありえないんだから！ あんた
のせいだ！」
本田「立ち上がりハルを抑える。
本田「落ち着けっ」

ハル「ブンちゃんのことよく知らないで！
ほんとはブンちゃんのこと好きじゃなかつ
たんじやない？」
雪「ハルの顔をじっと見上げる。
ハル「何であんたがのうのと生きてんの
よ！ あたしだったら後を追うくらいする
わよ！」
本田「春彦！ お前いい加減に——」
雪「ポンさん」
本田「ハツとして雪を見る。
雪「本田を見てにっこり笑う。
雪「いいですよ」
本田「でも」
雪「大丈夫ですから」
雪「立ち上がる。
ハルをまっすぐ見る。
雪「うっせー、ブス」
ハル「……はあ？！」
本田「ゆ、雪？」
雪「何で急に押しかけてきたお前につべこべ
言われなきやなんないんだよ！」
雪「ハルの肩を押し。
雪「帰れよ！ 出てけ！」
ハル「何すんのよ！」
雪「うるっせえ！ 帰れ！」
本田「ゆ、雪！ 落ち着けっ」
雪「あんたも帰れ！」
雪「本田とハルの身体を押し。
ハル「ちよっ！ 痛い痛い！」
本田「ゆ、雪ってば！」
雪「本田とハルを玄関に追いやる。
本田「ドアを開け本田とハルを外に追い出す。
雪「台所に走る。
本田「慌てて中に入ろうとする。
雪「塩を持ってきて本田とハルに投げつ
ける。
ハル「キヤー！ 何よ！」
本田「ちよっ！ 雪！」
雪「出てっよ！」

涙を流している雪。

体当たりして本田とハルを外に追い出す。
二人の靴を外に投げ出す。

ハル「ちよっと！ ブスって言ったの取り消しなさいよ！」

本田「雪！」

雪、乱暴にドアを閉め鍵をかける。

ハルの声「何なのよ！ もうっ！」

ドタドタと足音が聞こえる。

本田の声「春彦！」

追いかける足音が聞こえる。

力が抜けてしやがみ込む雪。

雪「（泣きながら）うううううう……！」

しゃくりあげて泣く雪。

近づいてくる足音が聞こえる。

本田の声「雪！」

雪、慌てて手で口を塞ぐ。

本田の声「ほんとごめん……。今日はとりあ

えず帰るから」

声押し殺して泣く雪。

本田の声「また来るな……。ほんとごめん」

走っていく足音。

雪「ううう……！」

雪、声を出して泣き始める。

テーブルの上の骨壺が目に入る。

雪「私だって……」

雪、自分の太ももを殴る。

雪「……ブンさん！」

雪、骨壺に駆け寄る。

蓋を開け遺骨を取り出す。

雪「ブンさん……」

雪、遺骨を口に運ぼうとした瞬間、手が

止まる。

まじまじと遺骨を見る。

一部が青く変色している。

雪「えっ?!」

× × ×

雪、スマホをテーブルの上に置く。

画面には『遺骨にカビが生えたら』というホームページ。床には封が開いた海苔のパッケージやせんべいの袋が散らばっている。雪、乾燥剤を骨壺の中に入れる。

雪「広がってなくてよかった……」
雪、骨壺の蓋を閉じる。
マスキングテープで蓋の周りをぐるぐるに止める。

ため息をつき骨壺を撫でる。

雪「ごめんね、ブンさん……」

雪、膝を抱える。

雪「ごめんなさい……」
俯いて泣き出す雪。

○公園（夕）

ベンチに座ってスマホをいじっている雪。

横に買い物袋が置いてある。

スマホ画面に群馬の市外局番の電話番号。じつと画面を見つめる雪。

指が震えている。

スマホの電源を切る。

大きくため息をつき目を閉じる。

頭を乱暴にかく。

○アパート・正門前（夕）

草取りしている富美子。

買い物袋を下げた雪、歩いて来る。

富美子、気づいて、

富美子「おかえりなさい、雪ちゃん」

雪「ただいまです」

雪、歩いて行くこうとする。

富美子「あ、雪ちゃん」

雪「はい」

富美子、雪を手招きする。

富美子「おいで」

雪「はい？」

○同・裏庭（夕）

雪「迎え火？」

富美子「そう」
富美子「地面に置いたおがらと草にチャツカマンで火をつける。だからご先祖様がうちへ帰って来れますようにって目印になるの」
雪「あ、もうお盆でしたっけ」
富美子「そうよ。……早いわねえ」
雪「そっか、もうそんなに日が経ってるんだ」
富美子「……最近ポーツとしてだから心配だったのよ、雪ちゃん」
雪「あ、あは」
富美子「ご飯は？ 食べてるの？」
雪「食べてます」
富美子「夜は眠れてる？」
雪「ポーツとしてるのは生まれつきですからご心配なく」
雪「煙、しゃがんで火を見つめる。」
富美子「ええ。ご実家ではやったことなかった？」
雪「うちはそうゆう習慣なくて」
富美子「そうなの」
雪「帰ってきてきてほしい人もそんないなかったですし」
煙が雪の方に向かう。
咳き込む雪。
富美子「こっちおいで」
雪「（咳き込んで）はい」
雪、煙から逃げる。
富美子「お父さん、今年も帰ってきてねー」
雪、空を見上げる。
富美子「文ーくんも帰って来るはずよ」
雪「まあ、ブンさんはうちにいるんですけど」
富美子「それもそうね」
微笑む富美子。
富美子「文ーくんは幸せね。ずっと雪ちゃんといえるんだもの」
雪「……どうですかね」

雪、草を引っっこ抜いて火に投げる。
燃えていく草。
雪「ブンさん、私といて幸せだったのかな。
今も、一緒にいていいのかな」
雪「ブンさん、ブチブチと草を引っっこ抜く。
ブンさん今でも生きてたかな」
雪「草を火に投げる。
富美子「そんなこと、ないでしょう？　ね、
雪ちゃん」
雪「手についた土を払う。
富美子「ブンさんね、心筋梗塞だったんですよ」
富美子「心臓にご病気が？」
雪「いえ。なんか警察の人は急性心筋梗塞？
って言うって急になるものだって。でも体調
不良とかはその前にあっただかもしれないっ
て」
富美子「そう……」
雪「私、全然気づかなかったなあ。体調悪い
とか、全然」
富美子「私だってそうよ？　文一さんと会っ
てもいつも通り、元気だった……」
雪「私は一緒に暮らしてたんですよ？　同じ
布団で寝て、顔合わせてご飯食べて。なの
に……」
雪「草を引っっこ抜く。
雪「私のせいだ」
雪「うんうんと頷く雪。」
雪「私のせい」
富美子「雪ちゃんのせいなんかじゃないわよ」
雪「じゃあ誰を恨めばいいんですか？」
雪「富美子を見つめる。
雪「誰のせいですか？　ブンさんは誰のせい
で死んだんですか？」
富美子「誰のせいでもないわ」
富美子「置いてあったボロボロのビール
ケースに腰掛ける。
富美子「私もね、お父さんを亡くした時、自
分を責めたわ。なんでもっと早く病院に連
れて行かなかったんだろう、なんでもっと

健康的なご飯を作れなかったんだろう、つて」

富美子、火を見つめる。

富美子「お父さんが亡くなったのは私のせいだって、強く思ったわ。それで苦しくなつて、今度は人を責めた」

富美子、ため息をつく。

富美子「ベテランのお医者さんだったら、娘が違う病院を探してたら、孫がもつとお見舞いに来てたら……」

富美子、笑って、

富美子「ひどいばあさんでしょう？」

富美子、手をさする。

富美子「お父さんを亡くしたばかりの頃はそんな恨みの感情でいっぱいだった。それ自分自身を苦しめたのね」

富美子、雪に微笑む。

俯いている雪。

富美子「でもね、ある日気づいたの。それはいらない感情だって。もう死んでしまつたのだから仕方ない、と言ってしまえばそれまでだけど、それだけじゃなくてね」

雪、顔を上げ富美子を見る。

富美子「恨みじゃ私は生きていけないって気づいたの」

富美子、雪の方を向く。

富美子「雪ちゃん、人生に恨みという感情は必ずしも必要ではないの。恨みから力を生み出して生きる人も中にはいるわよ？でも雪ちゃんは違うと思うの」

富美子、雪の肩をさする。

富美子「雪ちゃんは、幸せな思い出で生きていいのよ」

雪「幸せな思い出？」

富美子「文一さんと一緒に暮らしていて、あなたは幸せだったでしょう？」

雪「私は、そうですけど、でもブンさんは……」

富美子「これから生きていかなくちやいけな

いのはあなたなの」
富美子、雪の手を取る。
富美子「幸せな思い出を胸に、優しく握る。
から生きていくの。恨みなんかは捨ててい
いの」
雪「いいんですか？」
富美子「富美子、頷く。」
雪「だって、私」
富美子「いいのよ。文一くんの思い出だけ、
絶対に捨てちゃダメよ」
富美子、雪の手を強く握る。
雪、空を見上げる。
空に昇っていく煙。
雪、富美子の方を見て頷く。
微笑む富美子。
車が近づいてくる音が聞こえる。
車が停車する音。
ドアの開閉音が聞こえる。
英二の声「ばあちゃん！ 来たよー！」
富美子「あっ、はあい！」
富美子、立ち上がる。
雪、富美子の身体を支える。
富美子「ありがとう」
富美子、バケツの水を迎え火にかける。
ジュツと火が消える。
富美子「今日はね、娘夫婦と食事に行くの」
雪「いいですね」
富美子「お父さんが好きだったお店にね、み
んなで行くの」
微笑む富美子。
雪「楽しんできてください」
富美子「ありがとうね」
富美子、歩いて行く。
英二の声「ばあちゃん！」
富美子「はあい！ 今行きますよー！」
雪、富美子の背中を見送る。
ゆっくり深呼吸する。

○同・雪の部屋

チャイムが鳴る。

雪、ドアを開ける。

立っている本田。

本田の後ろに人影。

本田「よっ」

雪「ポンさん」

本田「後ろをチラッと見る。

本田「おい」

ハルの声「分かってるわよ」

本田「ほら、春彦」

本田「後ろからハルを引っ張る。

紙袋を持ってハル、服を整える。

ハル「ハルよ。もうっ」

対面する雪とハル。

雪「目をそらす。

ハル「あ、えっと……」

本田「泳がせるハル。

本田「ため息をつく。

×

×

×

テーブルの上の骨壺。
蓋の周りにマスキングテープが雑に目立
つ。

ハル「この前は本座しているハル。

ハル「ハル、深々と頭を下げる。

雪「いや、そんな……」

紙袋を持っている雪。

ハル「本当に、ひどいことを言ってしまった」

雪「そんな、私だって……」

ハル「本当に、本当にごめんなさい」

雪「あ、頭上げてください」

雪「お菓子まで頂いて……」

ハル「ほんの、お詫びの気持ちっていうか

……」

本田「こいつも反省してるんだ。許して、く

れる？」

本田「心配そうな顔で雪を見る。

雪「許すも何も、おあいこっていうか……」
雪「正座する。」
雪「私も、ひどいこと言ってますみませんでした」
雪「頭を下げる。」
雪「ハルさん、全然ブスなんかじゃないです。お綺麗です」
ハル「吹き出す。」
ハル「（笑って）ありがとう」
ハル「微笑む本田。」
ハル「……ずっと嫉妬してたのかもね、あんたに」
雪「私に？」
ハル「そう。ブンちゃんの彼女だから」
雪「そうなん、ですか？」
本田「うんうんと頷く。」
ハル「そりゃ羨ましかったわよ。だってブンちゃん、デコちゃんの話しかしないんだもん」
雪「え」
ハル「笑う。」
ハル「ブンちゃん、酔っ払うといつも『デコちゃん、デコちゃん』って」
本田「（笑って）そうそう」
雪「デコちゃ……」
雪「おでこを押さえる。」
ハル「だから会ってみたかったのよね、あんたに」
ハル「骨壺を見つめる。」
ハル「ブンちゃんは本当に……」
ハル「雪を見る。」
ハル「あんたが好きだったのね」

× × ×

パソコンで文字を打っている雪。
ふと手が止まる。
ウォークインクローゼットに向かう。
戸を開け、奥の方を探る。
ノートパソコンを取り出す。

見つめ、ステッカーを撫でる。
テーブルに置き、開く。

電源ボタンを押す。

パスワード入力画面。

雪、息を吐く。

『decochan』と入力する。

スタート画面が開く。

雪「何だよ……。デコちゃんって……」

雪、おでこを押さえる。

骨壺を見る。

雪「付き合った頃にあだ名じゃん」

○住宅街

歩いている本田とハル。

ずっと鼻をすすするハル。

本田「ハルにハンカチを差し出す。」

本田「負けを認める？」

ハル「うるっさいわね」

ハル「ハンカチを奪い取る。」

ハル「そもそも同じ土俵に立ててないわよ」

ハル「ハンカチで目を拭く。」

ハル「負けとか勝ちとかそういうこと言えない

いくらい、ブンちゃんあの子にベタ惚れじ

やない」

本田「そうだな」

ハル「ハル、ため息をつく。」

ハル「あれが『デコちゃん』ねえ……」

本田「そう」

ハル「何で『デコちゃん』なの？」

本田「おでこ出してたんだよ。こうやって」

本田「前髪を手で結んで見せる。」

本田「出会った頃は髪長かったからさ、邪魔

なんなんないようにおでこ丸出したんだ

よ、あいつ」

ハル「だから『デコちゃん』ねえ」

本田「そ」

ハル「（笑って）ブンちゃん、そんな甘い

ことするのね」

本田「な、意外だよな。最初聞いた時はドン

引いたよ」

ハル「そんなことする人じゃないと思ってたのに」
本田「俺らの知らないブンがいるってことだよ」
雪「歩いていく本田とハル。
（≒）「ブンさんが忘れなかったのを、忘れていたのは私だった」

○アパート・雪の部屋（朝）
スマホのアラムが鳴る。

布団で眠っている雪。
スマホに手を伸ばし眠ったままアラムを止める。

雪「うーん……」
雪、布団の中で伸びをする。
伸ばした手が枕元の骨壺に触れる。

雪「冷たっ?!」
雪、バツと起き上がる。
手をさすりながら骨壺を見る。

雪「あ、ごめん。寒かったよね」
雪、テーブルの上の桐箱を手取る。
スウェットの袖を伸ばして骨壺を持つ。
ゆっくりと桐箱の中に入れる。

雪「よしっ、これで湿気対策は完璧！」
ニコツと笑う雪。

雪「朝ごはんにしよう」
雪、毛布を被り台所に向かう。

○同・玄関前（朝）

雪、出てくる。
新聞を持った富美子、歩いてくる。
雪、鍵を閉める。

富美子「あら、雪ちゃん。おはよう」
雪「おはようございます」

富美子「随分と早いお出かけね」
雪「あー、朝のバイト入ってて」
富美子「そう。今日も寒いからあったかくしてね」

雪「はい、ありがとうございます」
富美子「もう冬なのね」

雪「早いですよねー」

富美子「じゃ、気をつけて行ってらっしゃい」

雪「行ってきまーす」

雪「あー」

雪「あ、立ち止まり、富美子に向かう。」

富美子「あの、家賃は帰ってから渡しますんで」

富美子「ああ、はい」

雪「ほんと、すみません」

富美子「いいえ、大丈夫よ」

雪「今度から遅れないようにしますんで」

富美子「……雪ちゃん」

雪「はい？」

富美子「キツくない？　大丈夫？」

雪「え？」

富美子「一人で暮らすには少し家賃が高いで

しょう」

雪「あ、いやあ……」

富美子「雪ちゃんだけだし、半分にしても

……」

雪「そんなわけにはいきません！」

富美子「でも」

雪「バイトも増やしたし、大丈夫ですよ」

富美子「雪ちゃん……」

雪「じゃ、行ってきまーす」

雪、歩き出す。

富美子「あんまり無理しちゃダメよー」

富美子、雪の背中を見送る。

○住宅街（朝）

歩いている雪。

強い風が吹く。

雪「うー！　寒！」

鼻をすすり歩く雪。

雪（≧）「もうすぐ、ブンさんが死んで初めての冬が来る」

○出版社・会議室

向かい合って座っている雪と葉山。

葉山「はい、じゃあこんな感じで」

雪「はい、よろしくお願ひします」

葉山「ノツクの音。」

葉山「はい？」

神田「入ってくる。」

神田「お疲れ」

雪「お疲れさまです」

葉山「神田さん。どうしたんですか」

神田「いやどんな感じかなと思つて」

葉山「心配しなくても大丈夫ですよ、雪山先生は」

神田「いや葉山が」

葉山「え？」

雪「なんとかやっていますよ」

神田「そう？ ならいいんだけど」

葉山「ハツとして、

葉山「あ、そうだ。次回の打ち合わせなんです

すけどまた昼とかの方がいいですよね？」

雪「あ、えっと」

雪「雪、スマホを見る。」

雪「んーと、夕方にしてもらえます？」

葉山「了解です」

葉山「スケジュール帳を開いて書き込む。」

神田「葉山のスケジュール帳を覗いて、

神田「あれ？ 木曜ってバイト休みじゃ……」

雪「コンビニのバイトも始めたんです」

葉山「お金ないんですか？」

雪「えっと……、まあ」

神田「体調は？ 大丈夫なの？」

雪「大丈夫です、大丈夫です」

○アパート・雪の部屋

キーボードを打つ音が響く。

テーブルの上に桐箱。

パソコンと向かい合っている雪。

ため息をつく。

チャイムが鳴る。

雪、ハツと玄関の方を見る。

チャイムが鳴る。

雪「はい？」

雪、玄関に向かう。

ドアスコープを覗くと、男の姿が見える。
首を傾げる雪。

チラッとテーブルの上の桐箱を見る。

雪「どちら様ですか？」

男の声「佐藤と申します」

雪「佐藤……？」

雪、桐箱の方を見る。

靴箱から男物のスニーカーを出し、玄関

に置く。

ドアスコープを覗く。

男の声「……文一の伯父です」

雪「え……」

× × ×

テーブルの上に置かれた骨壺。

床に桐箱が置いてある。

佐藤進（器）、骨壺に手を合わせている。

台所でうるうるしてる雪。

鍋に水を入れ火にかける。

戸棚を開け中を覗く。

冷蔵庫を開け中を覗く。

雪「（ボソボソと）お茶、お茶……」

雪、棚を開け中を探る。

雪「（ボソボソと）コーヒー、コーヒー……」

雪、奥からスティック状の袋を取り出す。

ぱつと笑顔になる。

が、手に取ったのはスポーツドリンクの

粉末。

眉をひそめる雪。

× × ×

骨壺を見つめる佐藤。

雪「あ、あの」

雪、湯呑みを持ってくる。

佐藤「あ、お気遣いなく」

雪「い、いえ……」

雪、佐藤の前に正座する。

雪「あつ、えつと、白湯です……」

雪、サツと湯呑みを差し出す。
佐藤「……ありがとうございます」
雪「あっ、いえっ、あはは……」
佐藤「ズツと白湯を飲む。」
雪「あ、今日は新幹線で？」
佐藤「ええ」
雪「そ、そうですか」
佐藤「……」
沈黙が流れる。
雪「な、なんか食べますか？」
雪「立ち上がるうとする。」
佐藤「お気遣いなく」
雪「すみません」
雪「座る。」
佐藤「……今日伺ったのはですね」
雪「緊張して佐藤を見る。」
佐藤「実は、文一の遺骨を引き取りたいと思
います」
雪「え？」
佐藤「文一が死んでもうすぐ半年になるでし
ょう？ それなのに墓にも入れてないのを
親戚に言われましてね」
雪「えっと……」
佐藤「群馬の墓に入れたいと思います」
雪「……それは私に渡せと言っているんです
か？」
佐藤「そうなりますね」
雪「私に手放せと？」
佐藤「はい」
雪「え……」
雪「骨壺を見る。」
佐藤「いつまでもこのままではいけないと思
うんです」
雪「私はこのままでも全然」
佐藤「そうじゃなくて、ほら、世間的に」
雪「はい？」
佐藤「文一は一応長男ですし、家を出て行っ
たとはいえ墓石に名前がないのはちよつと
……」
雪「世間体のために引き取るということです

か？」
佐藤「えっと……」
雪「（むっとして）でしたらこれまで通り、私が持っています」
雪「骨壺を桐箱に入れる。」「
雪「そもそも引き取り手がなくて私が連れて帰ったんです」
雪「桐箱を佐藤から離す。」「
佐藤「……あまり揉めたくはないんですよ」
佐藤「雪を見る。」「
佐藤「胸元から封筒を取り出す。」「
佐藤「心ばかりですが」
雪「はい？」
佐藤「お納めください」
雪「何のつもりですか？」
佐藤「今まで遺骨を預かっていただいたお礼です」
雪「お礼って……」
雪「雪、封筒を佐藤に突きつける。」「
雪「結構です。私は文一さんと家に帰ってきましたというだけなんです」
佐藤「金額はお話次第で」
雪「は？」
雪「雪、佐藤を睨む。」「
雪「売れていることですか？」
佐藤「解決できるならお金を使うということですよ」
雪「何だと思ってるんですか！」
雪「雪、立ち上がる。」「
雪「世間体が悪いから墓に入れる？ふざけないでください！」
雪「荒い息遣いの雪。」「
佐藤「……今日のところはこれで失礼します」
佐藤「佐藤、封筒をしまい、名刺を差し出す。」「
佐藤「私の名刺です。何かあればご連絡を」
佐藤「受け取ろうとしない雪。」「
佐藤「佐藤、テーブルの上の名刺を置く。」「
佐藤「失礼します」
佐藤「出て行く。」

ドアが閉まる音。
雪、桐箱を抱きしめる。

○ゲイバー・店内（夜）

華やかな店内。
ダンスミュージックが爆音で流れている。
盛り上がった席にいる客たち。

カウンタ―席に座っている雪と本田。

めかしこんだハル、カウンタ―内にいる。

ハル「はい、生」

ハル「はい、本田にジョッキを差し出す。

本田「ありがと」

雪「ハル姉、私はウーロン茶で」

ハル「ウーロン茶？ ウーロンハイじゃなく

て？」

雪「ウーロン茶」

ハル「はいはい」

ハル「ハル、グラスにウーロン茶を注ぐ。

ハル「はいどーぞ」

ハル「ハル、グラスを雪に差し出す。

雪「どうも」

雪「雪、グラスを受け取る。

ハル「ハル、グラスを持つ。

ハル「はい、じゃあ」

ハル「本田・雪「カンパイ」

グラスを合わせて乾杯する三人。

男の声「ハルちゃん！」

ハル「はい！」

ハル「ハル、カウンタ―から出て行く。

ハルの声「やだあ、来てくれたのー！」

本田「なんだ飲まないの？」

雪「明日も朝からバイトなんぞ」

本田「またバイト増やしたのか」

雪「はい」

本田「お前あんま体強くないんだから。体は

壊すなよ」

雪「はい」

本田「……キツイのか、生活」

雪「いやカツカツってわけじゃないですけど」

本田「もともととブんと家賃とか折半だったん

だろ？ 倍になってキツイんじゃないの
か？」

雪「ちよっとは、まあ……」

本田「……」

雪「は？」

本田「飯食わなくなってもあれだし……」

雪「ポンさん、ぶん殴りますよ」

本田「ご、ごめん……」

雪「私のことよく分かっているくせに」

本田「悪かった。そうだよな」

本田「じゃ、別のところに引っ越したらどう
だ？」

雪「引っ越し？」

本田「あの部屋じゃ一人暮らしには向かない
だろ」

雪「うーん……」

本田「ブンと住んでた部屋だから出て行きた
くない？」

雪「いや、なんとというか。大家さんもいい人
だし？ 駅もスーパも近いし」

本田「他にもいい条件のところあるよ。俺も
探すから」

雪「うーん……」

本田「もつと家賃が安いところ探した方がいい
よ。ほら、俺たちみたいなクリエイターは
さ、明日どうなるか分からないんだから」

雪「そうですけど」

本田「ブンの遺骨は雪と一緒にんだから、ど
こ行ってもいいだろ」

雪「グラスの氷を指でつく。」

雪「ブンさんの伯父さんが来ました」

本田「群馬の？」

雪「はい。お葬式の時から初めて来て手合わ
せてました」

本田「何で急にまた」

雪「ブンさんを渡せって」

本田「は？ 遺骨を？」

雪「お墓に入りたいんだそうです」

本田「なんだよそれ」
雪「世間体が悪いからって」
本田「ほん、ため息をつく。」
本田「ほん、雪を見つめる。」
本田「雪、ブンのところはさ……」
雪「なんとなく分かりますよ」
本田「分かるか……」
雪「お葬式での空気感？　っていうか。そういうので分かりましたよ？　どこも一緒なんです」
本田「ブンもいろいろ苦労したからな」
雪「だろ？　なあって思いました。ブンさん何も言わなかったけど」
本田「……どうするんだ？」
雪「渡すわけないじゃないですか」
本田「だよな」
ハルの声「ちよつと」
雪「振り返る。」
仁王立ちしているハル。
ハル「今ブンちゃんのお骨を渡すとか渡さな」とか話してなかった？」
本田「聞いてたのか」
ハル「ハル、雪に顔を近づける。」
雪「ハル姉」
ハル「あたしはあんたのところだから安心できんの。よく知らないところにブンちゃんがいるなんて耐えられないわよ」
ハル「ハル、雪の肩を掴む。」
ハル「いいね？　雪。ブンちゃんを苦しめてきた奴らのとこになんか渡しちゃダメ」
雪「うん……」
ハル「いざとなったらあたしを頼んな」
本田「春彦が何すんだよ」
ハル「バーの仲間引き連れてすぐ駆けつけるから」
本田「そりゃ地獄絵図だな」
ハル「どうゆう意味よ」
本田「いや」

ハル「ちよつとみんなー？ ポンちゃんが

ー！」

本田「バツカ、お前やめろ！」

男の声「なににー？」

男の声「やだあー！ ポンちゃんじゃなーい！」

本田「本田の元にわらわら人が集まってくる。」

本田「ゆ、雪！」
笑っている雪。

○アパート・正門前

雪、歩いてくる。

雪の部屋の方を見ている佐藤と国塚

(おん)。

佐藤、雪に気づき会釈する。

雪、佐藤を睨む。

雪「何ですか」

雪「何で佐藤に詰め寄る。」

雪「何度話されても同じです」

雪「な、誰ですか」

国塚「国塚と申します」

国塚「国塚、雪に名刺を差し出す。

まじまじと名刺を見る雪。

国塚「弁護士をしています」

雪「べ、弁護士？」

雪、佐藤を見る。

佐藤「言いましたよね？ 揉めたくないって」

雪「べ、弁護士なんか連れてきてどういうつ

もりですか」

佐藤「どうしようってことじゃないんで

すよ」

国塚「ええ。まだ」

雪、眉をひそめる。

国塚「話が平行線になりそうということだっ

たのでご相談を受けましてね。ほら、第三

者がいる方がうまく話が進むこと、ありま

すでしょうか」

雪「他人がいたって同じです」

国塚「他人はあなたでしよう」
雪、キツと国塚を睨みつける。

国塚「文一さんとの関係は？」
雪「だから恋人です」
国塚「ご結婚は、されていないと」
雪「はい。だから？」
国塚「法律的にも世間的にも、他人、ということになりますよね」
雪「事実的には他人じゃありません」
国塚「婚約の意思が？ 事実婚ということですか？」
雪「こゝ婚約とかそういうのは……」
国塚「んー、他人である山本さんがご遺族の申し出を拒否する、というのはどうなんでしょう」
雪「何ですか？ 犯罪なんですか？」
国塚「いえ、犯罪ではないですよ。ただ、十分争う余地はある、ということですよ」
雪「佐藤を睨む。」
国塚「何食わぬ顔をしている佐藤。」
国塚「裁判、となると結構な費用がかかりますからねえ。小説家というのは収入が安定しないんだとか」
雪「国塚を睨む。」
国塚「あつ、脅しじゃありませんよ？ もしも話をしたままで。そんな怖い顔しないでください」
雪「もともとこういう顔です」
国塚「そうでしたかー」
国塚「ここにこしている国塚。」
国塚「それに山本さん」
国塚「国塚、咳払いをする。」
国塚「ご遺骨を雑に扱ってるだとか」
雪「雑になんてしてません！」
国塚「テープでぐるぐる巻きにしてるんですよ？」
雪「あれはカビがー」
国塚「ハッとして口を押さえる雪。」
雪「カビ？」
雪「し、湿気が入らないようにしてるだけです」

国塚「……山本さん。ご仏壇も用意されてないんですよね？」

雪「それが何か？」

国塚「群馬のご実家には先祖代々のご仏壇があります。お墓も立派なもので」

雪「仏壇とかお墓とか、そんなに必要なものですかね？」

国塚「亡くなった故人を弔うためです」

雪「今更？」

雪、鼻で笑う。

雪「お葬式だって形だけのものだったのに、弔う？本気で言ってるんですか？」

国塚「文一さんの、実のお母様の願いです」

雪「ブンさんのこと半年……、ずっとずっとほっといたくせに！」

国塚「昔の話でしょう？」

雪「だからって！」

富美子「雪ちゃん？」

富美子「雪に駆け寄る。

息遣いが荒い雪。

富美子「慌てて雪の肩を抱く。

佐藤「あなたたちは、何なんですか？」

富美子「あなたたちは、何を張って、」

富美子「こ、このアパートの大家ですが？」

佐藤「ご挨拶遅れて申し訳ありません。私、文一の伯父の佐藤と申します」

富美子「文一くんのか？」

佐藤「生前は文一がお世話になりました」

富美子「い、いえ……」

富美子「雪を見る。

佐藤「佐藤たちを睨んでいる雪。

富美子「何かご用件が？」

国塚「国塚、にっこりして名刺を差し出す。

国塚「弁護士为国塚、と申します」

富美子「弁護士？」

佐藤「先生、今日は……」

国塚「はい。今日はこれで失礼します」

雪「二度と来んな！」

富美子「雪ちゃん」

富美子、雪の背中をさする。

佐藤たちの背中を睨みつける雪。

○コンビニ・休憩室（夜中）

段ボールが積み重なっている狭い休憩室。

弁当を食べている雪。

スマホをいじっている。

スマホ画面には仏壇販売のホームページ

ジ。

雪、ため息つく。

店長、入って来る。

店長「ごめん山本さん、レジ入ってもらって

いい？」

雪「あ、はい」

店長「悪いね」

雪、立ち上がろうとする。

と、よろける。

尻餅をつく。

店長「山本さん！」

店長、雪に駆け寄る。

店長「大丈夫？」

雪「イテテ……。大丈夫です」

雪、腰をさすりながら立ち上がる。

店長「顔色悪いし、帰ったら？」

雪「ほんと、大丈夫なんで」

店長「いやでもさあ」

雪「稼がないといけないんで」

雪、出て行く。

○出版社・デスク

電話している葉山。

葉山「はい、了解しました。明日ですよ？明

日までは待ちますから」

葉山、電話を切ろうとする。

もう一度受話器を耳に当て、

葉山「明日ですからね？！」

葉山、受話器を置く。

マグカップを持った神田、寄ってくる。

神田「どうした」
葉山「雪山先生、締め切り伸ばしてほしいっ
て」

神田「珍しいな」
葉山「はい。なんでもバイトが立て込んでる
とか」

神田「バイトで？」

葉山「先生には小説に集中してほしいんです
けどねー」

神田「そうだなあ……」

神田「神田、コーヒーをすすする。」

葉山「あ、俺カフェオレで」

神田「んん？」

葉山「んん？」

○アパート・雪の部屋

布団に包まっている雪。

咳き込む。

雪「うー……」

マスクをつけた雪、布団から顔を出す。
台所に立っている本田の後ろ姿がぼんや
りと見える。

顔を反対側に向けると、テーブルの上に
置いてある骨壺。

ゆっくり起き上がり骨壺を手取る。

抱えたまま布団に潜る。

頬を骨壺にくつつける。

雪「あー、気持ち……」

本田「雪、お粥できたぞ」

雪「えー、食欲無いです」

本田「ちよつとでもいいから食べ」

本田「本田、どんぶりを持って来る。」

本田「ったたく、無理して働くからだ」

雪「だっだっ」

本田「だっだっでもへちまもない！」

雪「だっだっ、仏壇欲しかったんだもん」

本田「仏壇？」

雪「仏壇があればブンさんだっだっずつとここ
にいるかなって」

本田「雪……」

雪、起き上がりどんぶりを見る。

雪「うわー、『ボンがゆ』」

本田「よくここで作ってたな」

雪「ブンさんいっつも冬になると風邪引くから」

本田「雪は元気なのに食って」

雪「おいしそ」

本田「だろ？ ほら、食べな」

チャイムが鳴る。

ドアがノックされる。

佐藤の声「山本さん、佐藤です」

雪、布団に潜り込む。

本田、玄関の方を見る。

本田「（こそそと）佐藤って？」

佐藤の声「山本さん」

布団の中でもそもそ動く雪。

雪「（ぼそぼそと）ブンさんの」

本田、慌てて手で口を塞ぐ。

佐藤の声「大事な話があるんです」

雪、布団から顔を覗かせる。

○同・玄関前

佐藤、ドアをノックする。

返答がない。

ため息をつき、歩き出そうとする。

と、鍵の開く音。

雪、ドアを開け顔を覗かせる。

佐藤、会釈する。

○同・雪の部屋

佐藤「佐藤です」

本田「本田です。あの、文一くんとは高校か

らの友人で」

佐藤「そうでしたか」

本田「本田、雪を見て、

本田「そんでそのまま二人の共通の知人って

いうか」

骨壺を抱えている雪。

佐藤を睨みつけている。

本田「（こそそと）こらっ、雪」

佐藤「この間はすみませんでした。弁護士な
んか連れてきて」
雪「私を訴えますか？」
佐藤「そんなことしません」
佐藤「雪の顔を見る。
佐藤「でも、どうしても文一の遺骨を墓に入
れてやりたいんです」
雪「ブンさんは望んでないと思います」
雪「大事そうに骨壺を抱きかかえる」
雪「それどころか絶対に嫌がると思います」
佐藤「でしようね」
雪「不審そうに佐藤を見る」
佐藤「でもこんな言い方はあれですけど、死
んだ人間には関係ないじゃないですか。死
んだ後は結局、生きている人のエゴで葬式
なりなんなりするんだから」
雪「それは……そうですけど」
佐藤「生きている人間の、心を落ち着かせる
ために葬式をする、お墓を作る。そういう
面があると思うんです。だから文一がどう
思っているとか、今はもう関係ないと思いま
せんか？ もう死んでるんだから」
本田「心配そうに雪の顔を見る」
雪「ぎゅっと拳を握りしめ佐藤を真っ直
ぐ見つめる」
雪「でも、だから、嫌なんです。私がブンさ
んのそばにいたいんです」
本田「雪……」
佐藤「佐藤、姿勢を正す」
佐藤「敦子……妹（言い直して）文一の母親
が、遺骨を墓に入れたいと言いだしたんで
す」
雪「世間体のために？」
佐藤「もちろんそれもありませんが……」
雪「雪・本田、顔を見合わせる」
佐藤「実は、病気をしてまして」
本田「えっ……」
雪「……だったら何だって言うんですか」
本田「（諭すように）雪」

佐藤「さつきも言った通り、生きている人間の
のエゴです。お恥ずかしい話、文一にはか
なり肩身の狭い思いをさせてきました。家
庭でも居場所がなかったと思うんです。ど
うも家族と折り合いが悪くて」

雪、咳をする。

佐藤「家出同然で東京に行って、私たちも連
絡を取ろうともしないで……」

雪「ずっとほっといたわけですね」

佐藤「それで急に文一が亡くなったって知ら
せを受けて……。和解をしようともしなか
ったこと、妹は大変悔やんでるんです」

雪「遅いと思います」

佐藤「十分、私たちも分かっています」

雪「遅すぎると思います」

佐藤「でも、文一を墓に入れることで少しは
妹の心が軽くなると思うんです」

雪「ほんと、勝手ですね」

佐藤「何を言われても仕方ありません」

佐藤、頭を下げる。

佐藤「お願いします。妹に、文一への償いを
させてください。これが、最後になると思
うんです」

雪、佐藤から目をそらす。

本田「ご容態、悪いんですか？」

佐藤「文一が亡くなつてからはどんどん悪化
して……。たぶん兄の私より先に……」

本田「そんな……」

雪、咳き込む。

本田、雪の背中をさする。

雪「あー、頭痛……」

本田「……佐藤さん、雪の体調もこんなです
し、今日のところは」

雪「外で待っていてください」

本田「え？」

雪「ポンさんと少し話します」

○同・正門前

立っている佐藤。

寒そうに手をすり合わせる。

○同・雪の部屋

本田「窓の外を見る。」

本田「外寒いぞ」

布団をかぶってしゃがみ込んでいる雪。

雪「今まで散々嫌なこと言われたんです。少

しくらいの罰は受けてもらわないと」

本田「ため息をつく。」

雪が抱えている骨壺を見る。

雪「どう思いますか」

雪「本田の顔を見る。」

雪「お母さんのところに渡した方がいい？」

本田「俺が決めることじゃないよ、雪が決めることだよ」

雪「そうやって逃げるんですね」

本田「そりゃ逃げるよ。俺なんか決められ

ることじゃねえし」

雪「どうしたらいいんですかね……」

雪「骨壺を抱きしめる。」

本田「ブンさんならどうする？」

本田「ブン？」

雪「もしこれが、私だったら？」

雪「骨壺を撫でる。」

雪「私が死んで、絶対無いとは思うけど、私の家族が私を引き取りたいって言ったら？」

本田「ブンなら……」

雪「それで母親が余命短かったら？」

本田「……考えても仕方ないだろ」

雪「仕方ないけど、考えるしかないじゃないですか」

本田「ブンなら……」

雪「絶対渡しますよ。そういう人だから」

本田「だろうな……」

雪「バカにお人好しだから」

雪「骨壺を指で弾く。」

雪「コツンと音が響く。」

雪「でも私は……」

本田「雪は、どうしたいの」

雪「離れたくない」

本田「うん」

雪「でも、それでいいのかな」

本田「骨壺を見つめる。」

深呼吸して、

本田「……雪はきっと後悔すると思うよ」

本田「雪の目線に合わせさせてしゃがむ。」

本田「雪。遺骨をブンの実家に渡そう」

雪「え」

本田「そんなで、母親に十分反省してもらって、

墓に入れてもらおう」

雪「渡す？」

本田「うん。この決断を、俺のせいにしてい

いよ」

雪「ポンさんは渡した方がいいと思うんです

か」

本田「うん。渡さなかったら雪は自分を責め

ることになると思う。お前も十分、バカに

お人好しだぞ？」

本田「笑って雪の頭をポンポンする。」

本田「そんなで、雪がいつか渡したことを後悔

したとき、俺を恨めばいい」

雪「私は、誰かを恨みませんよ」

本田「さあ、俺の答えは言った。あとは雪が

乗つかるかどうかだ」

雪「……ブンさんなら、どうする？」

雪「骨壺を抱きしめる。」

○同・正門前

佐藤「タクシーが停まっている。」

佐藤「ありがとうございます」

佐藤「頭を下げる。」

手には桐箱。

佐藤「納骨が済んだらご連絡します。墓参り

に来てやってください」

本田「はい」

佐藤「雪さん」

佐藤「雪を見つめる。」

俯いている雪。

佐藤「本当にありがとうございます。妹のた

めに」

佐藤、頭を下げる。
雪、目を伏せたまま会釈する。
本田、桐箱を見て、
本田「あの、よろしくお願いします」
佐藤「はい。本当に、ありがとうございました」
佐藤、頭を深々と下げる。
雪、佐藤が持つ桐箱をじっと見つめる。
佐藤、タクシーに乗り込む。
本田、頭を下げる。
出発するタクシー。
本田「雪、中に入ろう。風邪がひどくなった
らまずい」
本田「雪？」
雪「ブンさん……」
雪、ヨロヨロと歩き出す。
雪「ブンさん！」
雪、走り出す。
雪「ブンさん！」
フラフラになりながら走る雪。
雪「ブンさん！」
本田、雪に駆け寄り後ろから抑える。
本田「雪」
雪、本田の腕から離れようと暴れる。
雪「ブンさん！」
本田「雪」
雪「ブンさん！」
本田「雪！」
本田、雪の肩をつかむ。
本田「ブンはもう死んだんだよ！」
雪をまっすぐ見つめる本田。
雪、力が抜けてしゃがみ込む。
雪「ブンさん……」
涙を流す雪。
本田、雪の目を見つめる。
雪「分かっているか？ 雪。ブンはもう死んだ」

本田「あれは骨だ！　ブンが死んで、肉が焼かれて残った、骨だ！」

本田「（声が震えて）ブンじゃないんだよ

……」

本田の頬に涙が流れる。

本田「ブンはもういないんだ……」

雪「う、うわあああああ！！」

雪「思い切り泣く雪。」

雪「ブンさん、ブンさん……！」

本田「ブンが生きているときに、最後に過ご

したのが雪でよかつた」

雪「うわあああああながら微笑む。

声を上げ泣き続ける雪。」

静かに涙を流す本田。

○アパート・正門前

晴れていて天気がいい。

駐車してある軽トラ。

食器棚や段ボールが積んである。

ハル、段ボールを運んできて軽トラに積む。

ハル「はあっ！　あつつい！」

ハル「ハル、タオルで汗を拭く。」

ハル「化粧落ちちゃうわよ、もうっ」

本田「いやあ、春彦がいて助かった」

ハル「ハルだってば！」

雪、段ボールを持って来る。

雪「ハル姉」

ハル「うん？」

雪「これも」

雪、ハルに段ボールを渡す。

ハル「お、重っ！」

雪「よろしくです」

ハル「ったく、人使い荒いわねえ。新人賞な

んで取るとやっぱ人って変わるのかしら」

本田「雪山大先生っ」

雪「（はにかんで）やかましいです」

ハル、段ボールを軽トラに積む。

富美子、掛けてくる。

富美子「雪ちゃん！」

雪「富美子さん」

富美子「これ、よかつたら食べて」

富美子、雪に紙袋を渡す。

雪「ありがとうございます」

雪、紙袋の中を覗く。

富美子「おはぎ。車の中でもみなさんと食べ

べて」

ハル「あらやだありがとうございます」

本田「ありがとうございます」

富美子「いいえ」

雪「富美子さん、今までお世話になりました」

雪、頭を下げる。

富美子「雪ちゃん……」

涙が溢れる富美子。

富美子「元気でね？ 体につけて」

雪「富美子さんも」

富美子、笑って涙を拭う。

富美子「寂しくなるわ。雪ちゃんは娘みたい

なものだから」

雪「富美子さん……」

富美子「これからも、いつでも遊びに来てち

ようだいね」

雪「はい」

富美子、雪の手を握る。

雪「富美子さんも、私のおばあちゃんみたい

でした」

ハル「そこお母さんじゃないのね」

笑う一同。

本田「雪、もう忘れ物ないか？」

雪「あ、じゃあもう一回見てこようかな」

本田「おう」

雪、駆けていく。

○同・雪の部屋

雪、入ってくる。

空っぽになった部屋。

窓から光が差し込んでいる。

部屋を見渡す雪。

雪 「……行こうか」
雪、出て行く。
ボタンと閉まるドア。

【終】